

集まっていた。その他の村人は、蛇籠に石を詰めては、川底へ落としている」

S E 人ばかり

千歌（M）「私たち女はというと、なにかで
きることはないかと思案し、炊き出しをす
ることにした」

千歌「はい、汗物はこちらですよ。慌てなく
ても大丈夫ですよ」

千歌（M）「私は炊き出しにかこつけ、与三
さんの姿を遠目にみられて、嬉しかったし、
どこかホツとしている」

巴「お嬢様、少し休みませぬか」

千歌「まだはじめたばかりですよ」

巴「お話ししたいことが、あるんです」

千歌（M）「いつになく神妙な面持ちで、巴
ちゃんが言った」

間

巴「お嬢様は福助さんと、百日参りを続けて

おるとか」

千歌「それは川普請の成就を祈願して……」

巴「ご婚儀の準備も、着々と進んでおるようですね？」

千歌「それは……」

巴「でも本当はそんなこと、望んではおらぬのでしよう？」

千歌「……」

巴「はつきり申してください、お嬢様」

千歌「もう決まったことです。女子おなごの身で、なにが言えましょう」

巴「お嬢様は与三さんのことを好いとるのでしよう？　そうなのでしよう？」

千歌「と、巴ちゃんのほうこそ、福助さんのことを……（声が小さくなり）ご、ごめんなさい……」

巴「ごめんなさい？　どういう意味ですか」
千歌「それは、だって……」

巴「お嬢様、そんな言葉、聞きとうなかつたです。巴が余計みじめになります。お嬢様

がもし福助さんを選ぶなら、どうか本気で福助さんのことを愛してください。でない
と福助さんがあまりに不憫です。与三さんのことは、今日を限りに忘れてください」

千歌「忘れる？ そんなことは……」

巴「勝手ですよ！ これでは、福助さんも与三さんも、振り回されてしまう」

千歌「私が、振り回してる？」

巴「すみません。今日で巴は、お嬢様のごことが嫌いになりました」

千歌「巴ちゃん……あの、もしよかったらコレ、受け取ってくれない？ 今の私が持つてちゃ、いけないような気がするし」

巴「なんですか！ こんな御守りッ」

S E 暴風雨

ニュース「ニュースの途中ですが、二五日午前七時現在、愛知県知多半島に上陸している台風一五号について、今、大雨特別警報